



壬生の花田植え

念願の「壬生の花田植え」を見てきました。梅雨時のニュースで取り上げられることもあるので、ご存じの方も多いかと思います。広島県の北部に残る民俗行事です。壬生は地区の名称です。国の重要無形文化財に指定されるとともに、一昨年には、世界無形文化遺産に登録されたそうです。

あたり前のことですが、花田植えは田植えです。秋に収穫する田んぼで花田植えは行われます。



中嶋哲夫の「人事も歩けば」

行事は、2時間弱。飾り牛が田んぼの代掻きをして始まります。花鞍をつけ、幟を立てた黒毛和牛。花鞍は車1台分くらいのお金が必要とされ、幟には「農宝」と書かれていますから、牛に感謝の気持ちを込めて作業をされるのでしょうか。実に美しい牛です。なんでも、前日にはシャンプーとリンスをするとか。

代掻きが終わると花田植えのクライマックス。早乙女の田植えです。サンバイ役の音頭取りが正面に立って唄を歌います。サンバイは田の神様ですから、音頭取りは神様の代理人です。サンバイの音頭に合わせて、赤い袴や緋の着物で着飾った早乙女達が、歌いながら稲を植えます。作業の進行に伴って歌詞も変わっていきます。横に張られた縄に沿って



▲早乙女達による田植えの風景

稲を植えるので、早乙女達も横一列に並んでいます。早乙女の後ろには二列に並んだ、囃子隊が鉦や太鼓で囃します。そうして田植えを進めて行きます。狭い田んぼに牛や人がいっぱいになり、賑やかで華やかな田植えです。

もともと、田植え歌は作業能率を高めるために歌われたといえます。歌のリズムに作業リズムを合わせ、能率を高めつつ疲労しないスピードで作業を進めます。つまり、唄はリズム調整装置です。同じような唄に、酒造り唄、大漁節、土搗き唄、木遣りなど、仕事唄と呼ばれる民謡があります（一説では日本民謡4万曲のうち、8割は仕事唄とのことです）。

われわれの仕事が肉体労働から知的労働に移行して半世紀くらい経過したでしょうか。その知的労働の世界においても協働作業が大事だといわれています。しかし、知的労働には仕事唄がありません。知的協働労働のリズムを揃える装置を見つけ出すことが大事な気がします。

（MBO実践支援センター代表）

